野坂本物語解題

金子金治郎

美しい姫君と貴公子の悲恋物語という、これもありふれた中世擬古物語の一つには違いないが、そのテーマは、「むぐら」などとともに、今後考えてみていいものと思われる。厳島神社宮司野坂元定氏所蔵の古写本で、物語名を欠いているので、所藏者の名を冠して、仮に野坂本物語と呼んでおくことにする。現存するのは一冊であるが、前に欠けた部分があるらしい。他に所伝もないようであるから、野坂宮司の許可を得て飜字し、原本および内容について紹介しておきたい。

原本について

原本の体裁は、横二三cm、縦二七・四cmの袋綴で、表紙は浅黄色の紙表紙である。ただし表の表紙は、浅黄色の表面が剝げ落ちている。剝げ落ちたままで、題簽もなく、左下方に「哥書」と墨書している。この「哥書」がもともとの書名だとは考えられない。紙は楮紙五十丁、最初の二丁と最後の一丁とが白紙で、本文は第三丁の表から書かれ、墨付は全部で四十七丁になる。一面十二行、一行は二十二、三字前後で、和歌は一字下げにし、一行に一首を記している。虫損は前半に多く、後半はそれほどでない。

書写の時期は、奥に

天正[二]年六月八日　　棚守房顕　八十一才

とあるのがそれである。房顕は天正十八年一月二十日九十六才で歿しているから、八十一才は天正三年になる。この奥書の[二]の部分には虫損があって、ちょうど三の上の一画に当たる部分が欠けている。[二]は三とあったもので、天正三年に相違ない。自筆の「房顕覚書」（房顕記）の奥にも、

天正八年後三月上旬　　八十六才

棚守左近衛将監　房顕朝臣（花押）

とあって、天正三年の八十一才は確かである。（続々群書類従所収の房顕記に八十八才とあるは誤り）棚守房顕は、野坂宮司家の祖先で、房顕に関しては、すべて野坂元定現宮司の御教示を得て執筆している。房顕の筆に成るものは、この外に、「大内殿事記」「諸

神本懐集」「仁和寺宮五十首和歌」と文書類があり、「大内殿事記」には、

天正八年卯月廿八日　　八十六才

柵守左近衛将監

の奥書があるよしである。房顕記によると、房顕は卜部兼右から神道伝授を受け、一條、二條、九條、広橋、飛鳥井、万里小路などの公卿との交渉があり、連歌に堪能で、大内義隆の厳島奉納万句、高野山藤坊の連歌、聖護院下向歓迎の千句などに参加し、毛利家寄進の天神堂で月次連歌を興行している。この物語がどういう事情のもとに書写されるに到ったかは、房顕記にも記載がないが、大内・毛利を背景とする恵まれた文化圏にあったことと、房顕の文学的な素養と関心によるものであることはいうまでもない。

書写の状況を見ると、かなり多量の誤脱や重複などがあって、本文の読解を困難にしている部分が少くない。全部は挙げきれないので、その一部を例示してみる。一二字の誤写はもっとも多い。（括孤内は正しいと思うもの）

（1オ）むろのい（八）しまの
（3オ）むねもふす（さ）かりて、
（7オ）せい（ん）やうてん
（10オ）聞えあらさは（はさ）まほ敷
（13ウ）かく聞こし（え）たまへる、
（18ウ）古とのゝ御いうも（もう）とにて、
（20オ）宮の大将（納言）は
（27ウ）おもひあまりてきゝ（云ひ）出し事、
（30オ）大将（納言）おはしましにけり、
（34オ）中将（納言）
（37ウ）さ（た）いしやうのおわせねは、
（45ウ）うつくしくおゝ（ひ）いて給へるを、
（46ウ）御つほねむね（め）つほなり、

宛字が若干ある。

（11ウ）けに理（事有り）かほの
（15ウ）これにまします時（と聞）きて
（17オ）少将の宮（みや）うふ
（22ウ）たち送（遅）れ奉るへしとも
（44オ）藤（頭）の中将

脱字も多い。

（1オ）（少）将君に
（5オ）いとゝ身（に）そふこゝちして、
（7ウ）いもう（と）君にや
（10オ）彼し（ゝ）うの内侍か、
（14ウ）あやし（う）こそと
（18オ）なてし子のむ（ま）れ出たまひて、
（21オ）木の葉（と）共に
（28オ）しるへして（一つ）蓮すの
（31オ）かゝらん人を見奉り（な）は、
（36ウ）在つるお（も）かけ、
（40ウ）うちあや（し）かりておはす、
（47オ）い（た）つらにもや成給ひしか

誤字、重複もかなりある。

（5オ）何にいのちのちなからへて、
（6オ）むめのこうちき、ゝなるきなるかた（ら）きぬ
（19オ）いかていかて見侍へき
（21オ）女君の見そ初めし
（28ウ）はかなかりけるちきりのちきりのほとのみ、
（38ウ）うゑも御なみたうゑも御なみた聞せたまへるにも
（42オ）さしもめてたかりし在さますかたむなしくて、その面かけたにめてたかりし御あり様すかたむなしく、そのおもかけたに遠さかる心ちして

以上は誤脱等の例で、比較的はっきりしたものを挙げた。それに準ずるものはこの外に多いが、中には誤脱は確かにあると思うが、正しい本文の推測できないものもある。その中特に、かなりの量の脱文があると思われるのは、（36ウ）から（37オ）にかけての次の部分である。

中宮は、在つるお（も）かけ心にかゝりて、むかし今のおもひ、かきくらしをほしみたれて、つきせすめつらしけに、いかゝ（ゝ）つれつれとおほしめされめされけるにや、面目おほえ』なむ、しつ心なかりつるをなとのたまはする、中宮は、袖のけしきもしるからむと、

この部分は、帝が花山院の花の宴に行幸なさった留守に、桐壺の中宮が亡き愛人との間に生まれた姫君と密かに会ったところで、「つきせすめつらしけに」までは、わが子に会った後の中宮の感懐と思われるが、その後の「いかゝつれつれとおほしめされけるにや」からは、花の宴から御帰りになった帝が、中宮を慰めるところになる。その間に少くとも帝還御の文が脱しており、その他にも文の乱れがあるようである。

もう一か所、これは話の筋にも関係するので、予め検討しておくべきところがある。最後に近く、帝が桐壺の中宮が御生みになった第二皇子を御鐘愛になる場面に続く部分である。

まことやとうたひの、御心ちに（わ）か（に）わつらはせ給ひて、ほとなくうせたまひしかは、ゐんおほしなけく事かきりなし、たゝひとりもち奉り給へれは、袖の玉ひかりうしなへる心ちして、おほしなけく御事かきりなし、其かはりにこの宮とおほしめされけれと、したひはいかゝとて、すえ奉り給ふ、此宮は、今一二年も過なは、我はおりゐて、くらゐをゆつり奉らむとおほしめして、一宮春宮にいさせ給へる（45ウ―46オ）

「とうたひ」（当代）の急な崩御が記され、御父の院（朱雀院）の御嘆きと、皇位継承についての御処置が記されている。「この宮」「此宮」とあるのは、前からの叙述の続きで二宮となる。その二宮をどうされたかがはっきりしないで、一宮（宣耀殿女御所生の第一皇子）を春宮に御定めになったとなる。（春宮になった一宮が二宮の誤写でないことは、この後に続く春宮妃入内のところではっきりしている）問題は、二宮の御処置である。当代崩御の後、当代御鐘愛の二宮を御位にと思われたが、次第もいかがと御反省になった結果、「すえ奉り給ふ」と続けば、御位は一宮となりそうである。ところが後文で一宮は春宮となり、此宮は（二宮）、一二年後には御譲位を御考えになっている。となれば「すえ奉り給ふ」は、二宮を御位にとならなければならぬ。がそうなれば、その前の「したひはいかゝとて」との間に文脈の矛盾がくる。これが問題で、軽々に扱えないところであるが、「したひはいかゝとて」と「すえ奉り給

ふ」の間に、脱文があったのではないかと考えられてくる。

以上が書写の状況についての概観である。かなりの誤脱があり、文意文脈の把捉に困難を感ずるところが少くない。しかし落丁とか錯簡による脱落や乱れはないようである。

内容について

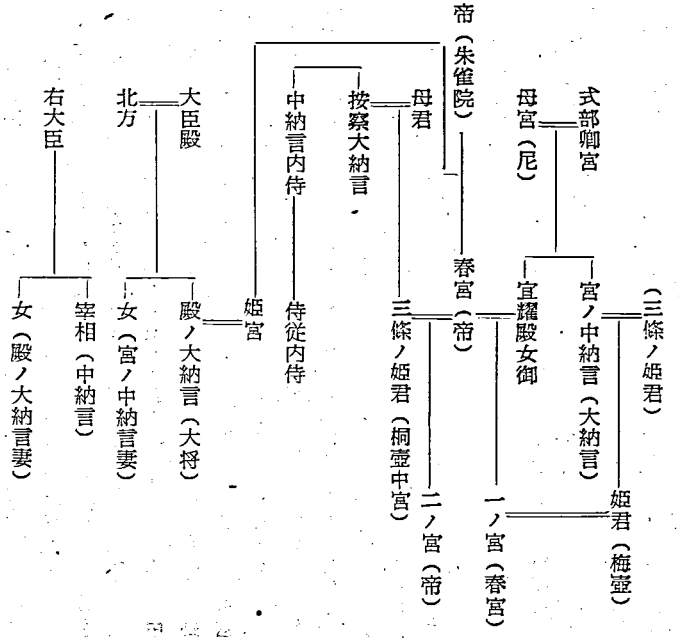
この物語には書名がない。現存する物語の一部分でもないらしいから、書名のみ、あるいは書名と和歌だけが伝えられている散逸物語の中に該当するものを捜してみる必要がある。この物語には三十九首の和歌があるので、風葉和歌集、さらには拾遺百番歌合と当ってみても該当するものは見当らない。書名だけ伝える物語書目の類についてみても、それと推測する手掛りは、今のところない。物語名がわからないことは、作者はもとより成立した時期を考える上でも不利である。外部的な傍証の援用もできかねるからである。結局内容についてみて、そこからどれだけのことが言えるかを導き出す外はない。

この物語の内容は、始めにいったように、美しい姫君と貴公子の悲恋物語である。登場人物はそれほど多くはなく、構想も比較的単純である。現存するのは物語の途中から結末までで、前を欠いていることは、前にも触れたが、現存部分から推測できる欠脱部分の内容は、およそ次のようである。

故按察大納言の三條邸には、遺児の美しい姫君が、母君、乳母の宰相、侍女少将らと心細く暮している。琴の音を便りに宮の中納言が尋ねより、やがて相思相愛の仲になった。ところが宮の中納言は、時の大臣殿の女と結婚させられ、心にもなく三條邸へは疎縁を続けている。その間に三條邸では、姫君に女の子が生まれ、母君は死去する。男の無情を恨み、処置に窮した挙句、生まれた女子は叔母の中納言内侍に預けてしまう。またどういういきさつかわからないが、姫君は大臣邸に迎えられ、対の屋に住むことになる。その後で宮の中納言が三條邸を訪ねた時は、すでに住む人もなく、僅かに姫君の筆の跡を残すだけであった。大臣邸に迎えられた姫君に対し、大臣の子の殿の大納言は、激しい思慕を燃やすが、姫君には父大臣の計いで、春宮妃として入内する話が進んでいる。

以上が概要で、この外に、殿の大納言、宮の中納言、右大臣の子の宰相などが親友であったことも記されていたらしい。本物語の主人公になるのは、三條邸の姫君と宮の中納言とであるが、現存部分では、殿の大納言と宰相の恋愛がかなりの比重で描かれてくる。

筋を述べる前に、登場する人物の系図を掲げておく。



系図外の主要人物

宰相三位（桐壺中宮乳母）

少将命婦（同侍女）

式部大輔（宮中納言傳）

中将君（朱雀院姫宮侍女）

（以上）

現存する本物語の梗概をやや詳しく述べることにする。

三條の姫君が春宮妃として入内することが決定し、殿の大納言は邸内の対の屋に姫君を訪うが、胸の思いを打ち明けることができない。宮の中納言は、捜している姫君が大臣邸にいることを知り、恋慕に心を痛めている。苦しい夢の中に姫君が現われ、

たねまきし行ゑもしらぬなてしこの花のあたりをたつねてもみよ

と読むので、三條邸で見た姫君の筆の跡も思い合わされ、さては二人の間に撫子のような子どもがあったのかと知るのだった。入内の日になって、殿の大納言は胸の思いを打ち明けるが、姫君の答えはなく、大臣殿の美々しい経営で入内してしまった。御局は桐壺で、春宮の御寵愛は一方でない。春宮には、先に入内した宣耀殿との間に若宮もおられるが、今は桐壺のみ御寵愛になっている。

○親友の宰相は、時々侍従内侍に通っているが、ある時そこで美しい女の子を見た。宮の中納言によく似ているので素性を尋ねたが、教えてくれない。この話を宰相から聞いた宮の中納言は、さてはわが子かと思い当るのだった。その母のことは宰相にも秘して語らなかったが、今はこの撫子のことのみが恋しく、宰相に頼んで行衛を捜すが、いい返事がない。このごろ宮の中納言は、大臣殿の女のところへも遠ざかっている。

○御譲位があって、先帝は朱雀院となられ、春宮が位につかれた。桐壺は宣耀殿を越えて中宮になった。除目が行われて、殿の大納言は大将、宮の中納言は大納言、宰相は中納言になった。宮の大納言は依然として撫子に会えないでいるが、ある時、侍従内侍

の局に立ち寄り、偶然来合わせていたわが子撫子を見ることができた。その後桐壺中宮の侍女少将命婦の局に忍んで行き、疎縁になった事情や、三條邸で残っていた筆の跡を見たことなど、これまでの苦しい思いを訴え、中宮への文を托した。

○宮の大納言はついに病気になり、秋の深くなるままに重くなるばかりである。父の式部卿宮や母宮は、驚いて平癒の祈禱を続け、殿の大将や中納言もねんごろに見舞ってくれる。その中納言に対して中宮との秘事を告白した後、間もなく宮の大納言は病死してしまった。人々の悲嘆はいうまでもない。桐壺中宮の御嘆きも深いがそれを御覧になった帝は、日頃不審に思っていたのは、さては宮の大納言と関係があったためかと思い当たられたが、中宮を苦しめまいと、御咎めにもならない。亡き人の遺書は、中納言と中宮に届けられた。母宮と御傅の式部大輔は出家した。母宮は故人の居室に残る歌によって、遺児のあることを知った。

○年が改まって春霞の立ちわたる頃、殿の大将と中納言は、連れ立って亡き宮の大納言邸を訪問した。その帰路、朱雀院で美しい姫宮を垣間見た。中宮によく似ているので、二人とも強く心を引かれた。あくる夜、殿の大将は、中納言を出し抜いて、この姫宮を自邸に奪い帰り、中宮に遂げられなかった思いを慰めるのだった。

○中宮はわが子撫子が懐しく、帝の花山院の花宴に行幸の留守に御召しになった。二月頃から中宮御懐任の徴があって、帝は御慰めのため、殿の大将、中納言などに命じて管絃の御遊びをなさった。

○式部卿宮は亡き大納言の忘れ形見の撫子を捜していたが、ようやく対面することができ、それから時々来るようになった。この宮へは、御孫の一宮（宣耀殿女御腹）も時々御見えになっている。

○中納言は、今は殿の大将の妻となっている朱雀院の姫宮が忘れがたく、時には、大将邸に忍んで垣間見もしたが、遂げられない恋慕の苦しさに、いっそ遁世をとしきりに思っている。

○十月晦日中宮の御産があって、若宮が御誕生になった。帝の御寵愛は、一宮以上である。その帝は突如崩御になった。朱雀院の御計らいで、中宮腹の若宮が御即位になり、一宮は春宮となられた。春宮妃には、幼な馴染の撫子の姫君が迎えられた。その花やかさに引きかえ、中納言は晴れる間のない物思いに沈み、出家をのみ願っているが、亡き宮の大納言の苦悩が、しみじみ思い合わされるのだった。

以上が梗概であるが、この後に、

「かゝるありかたきしゆくせのめてたさを、後の世の人に見せたてまつらむとて書留ぬ」

という草子地の一文があって、この物語を閉じている。

歌は三十九首あるが、その配分を見ると、

宮の中納言（大納言）	23首
宰相（中納言）	7首
殿の大納言（大将）	4首
侍従内侍	2首
三條ノ姫君（桐壺中宮）	1首
宮の中納言妻	1首
宮の中納言母	1首

となっていて、宮の中納言がずば抜けて多い。この人を主人公にしていることと、その点よく照応している。それに対して女主人公の三條姫君（桐壺中宮）の一首は、あまりに少い。欠けている前半の三條邸での不如意な恋の場面には、かなりあったと想像されるが、それでも男よりずっと少かったろう。要するにこの極端な対照は、この物語が、女性よりも男性の心情叙述に重い比重がかけられ、男性の側の慕情・迷い・自責などが詳細に叙述されていることと照応している。宰相（中納言）の歌が主人公に次いで多いのも、同じケースからである。

この物語の内容は、およそ以上のようである。話のポイントをもう一度記してみると、

① 宮の中納言と三條の姫君との深い純愛。
② その間に愛の結晶（撫子の姫君）がある。
③ 男が大臣の婿に迎えられ、心ならず疎縁になったことが悲劇の因となり、二人は別れ別れになる。
④ 男は、失恋の苦悩を負って病死する。
⑤ 女は、悲嘆の中にも幸運に恵まれ、春宮妃・中宮となり、御子は帝位につき、男との間の子も春宮妃となる。

となり、これが中心で、これに殿の大納言と宰相との恋愛が副次的に絡んでくる。こう整理してみて、中世擬古物語の中に、これに類似する主題の作品を捜してみると、「むぐら」と忍音物語が近似し、やや離れて「海人の刈藻」がある。「海人の刈藻」は、すでに東宮妃となっている女君と密通して若君が生まれるところに大きな相違がある。その点「むぐら」にしろ、忍音物語にしろ、本物語とともにより道義的である。

「むぐら」と忍音物語では、この物語により近いのは「むぐら」の方である。忍音物語の方から見ると、

母の尼と侘び住居をしている女主人公の姫宮が、ふとしたことから男主人公の四位少将と相愛の仲になる。姫宮は少将にかくまわれて若君まで生むが、少将は父内大臣のため政略結婚を強いられ、姫宮との間を割かれてしまう。少将は、失恋の苦悩から世を遁れて横川に籠るが、姫宮の方は、帝の御寵愛を受けて中宮となり、御子は春宮となって、行末の繁栄を約束される。少将との間の若君は、累進して中将になる。

というのが骨子である。生まれたのが男の子であり、男性が死ぬのでなくて出家する点は、「海人の刈藻」の系統であるが、男女の純愛に出発する点で、「海人の刈藻」と区別され、むしろ本物語に近似する。登場人物を節約し、筋を簡明にしている点では、特に本物語の手法に似ている。

「むぐら」の方は、骨子の点で本物語ともっとも近似する。相思相愛の女（右大臣の先妻の子）と男（内大臣の子の大将）との間には、姫君まであるが、男の母親によって仲を割かれ、男は悲嘆の中に病死し、女は帝寵を得て女御となり、末めでたく繁栄するというにある。これには、女の側には、兄（僧都）・妹（春宮妃）とともに継母の虐待を受けるという継子物の要素が加わり、二人の仲を割いた男の母は、その非道のために、春宮の前の妃であった娘（大将妹）が不運に陥り、自分も大将の死とともに頓死するといった報復があり、さらに男は、清水寺の霊夢によって、失踪した女の行衛を知り、女君は山井寺を建立するなど、本物語にはない潤色がある。しかし骨子の点で本物語ときわめて近いものがある。この「むぐら」

で強調されるのは、女君の幸運にある。女御から女院となり、御子は帝位につく。春宮妃となった妹君も、中宮となり、その御子は春宮になる。兄の僧都は法務大僧正となり、父右大臣は太政大臣となるごとくで、「ひきかへめつらしきほとの御ことゝもは、よのためしにかきとゝむる人おほかるへし、春宮の御母、いまは女院ときこゆ、このころは、この御ゆかりよりほかのさいわいなかりけり」と評し、他に二か所同趣旨の評があって、女君の未繁昌が強調される。それに対して、悲恋に死んだ大将はどう位置づけられているか。もとより大将との恋愛が中心問題として扱われ、女君は、厚い帝寵の中でも忘れがたく追懐し、親しかった春宮も常になつかしがっている。大将とその死は決して軽く扱われていない。というよりも、その死に非常な意味が認められている。

院の一の宮、む月のうちにつかせ給ぬ、母女御のめてたさに、大将はうせ給にしなりけり

とあるのがそれである。大将の死は、女君の「めてたさ」のためのものだというのである。女君の幸運を実現するための男の死であり、男の死を犠牲にして、女の幸運が成就するというのである。

「むぐら」の主題の核心は、実にそこにあったのである。

野坂本物語が「むぐら」に近いというのも、「むぐら」の主題の核心とするところに近似しているからである。本物語の最後に、

かゝるありかたきしゆくせのめてたさを、後の世の人に見せたてまつらむとて書留ぬ

とあることは、前にも挙げた。この結びは実は唐突であって、梗概で記したように、この前には、親友の中納言が、亡き宮の大納言の苦衷を思いやりながら、慈げられないわが恋に泣いているところである。それを「かゝるありかたきしゆくせのめてたさ」というはずはない。ここは「むぐら」の最後に、「たゝそのゝちは、この御ゆかりのことのみ、めてたきためしにて……」と女君の幸運を評しているように、三條の姫君の幸運を祝福したもので、「むぐら」と同じ強調を行ったものである。ただ男君の死については、「むぐら」が行ったような草子地による意味付けは見られない。それは見られないけれども、筋の運び、男の死の重い扱い方からいって、「むぐら」のテーマの核心から少しも離れていないと認められる。宮の大納言の死によって、三條の姫君の幸運が成就したという点に、本物語のテーマの核心があると思う。そしてこのテーマの追求という点に限っていえば、「むぐら」よりもいっそう単純化した構想だということができる。

主題の点から野坂本物語が「むぐら」や、さらに忍音物語と同類であることを指摘した。ここから本物語の制作の時期を導くことは、実は容易でない。いうとすれば確証のない推測をいうだけである。ここではただ「むぐら」的主題を扱った擬古物語の一つだという点を指摘するにとどめたい。こうした主題が、中世物語としてどんな意味を持つか、こうした主題が社会のどんな状況下に存在し得たかなどについては、これからの研究に期待したいと思う。

——広島大学文学部教授——